

コロナ禍で入学した大学生が抱える困難と、 求められる関係性について

—— 学生相談活動の見地から ——

甲南大学学生相談室 西 浦 太 郎

I. 問題と目的

2019年12月に新型コロナウイルス感染症の世界的な流行が起こり、WHO（世界保健機関）によりパンデミック宣言がなされた。我が国においては、政府により緊急事態宣言が発令され、感染拡大防止のために外出・活動の自粛が続き、多くの高等教育機関において遠隔授業や、遠隔と対面授業が織り交ざる形で授業が実施されてきた。そして、このような状況を受け、多くの大学において、コロナ禍で困難に直面する学生に対して、学業や学生生活、そして心理面への支援がなされてきた（例えば、山内ら2020, 佐藤2021, 高石 2021）。2023年1月現在、コロナ禍が始まって約3年が経過したが、完全な収束を見ないまま長期化の様相を呈している。

2021年に日本私立大学連盟が実施した大学生対象のアンケートによると、学生の各学部・学科への満足度は向上しているものの、大学生活における満足度は減少している結果となった（日本私立大学連盟, 2022）。学部への高評価は、コロナ禍の中、各学部の尽力に依る所が大きいが、これとは別に学生は、コロナ禍の影響により大学生活においてある種の物足りなさや思い通りにならなさを感じている状況にある。

この中で、2020・2021年度に入学した学生は、活動自粛のため長期に渡り、多くの遠隔授業を受け、オンキャンパスで人間関係を構築し、サークル・部活で活動することが困難であった。内田・黒澤（2021）は、コロナ禍により大学入学後の最初の学期がオンライン授業であった1年生は、過

去に対面授業を受けている2年生以上の学生よりも、適応においてより多くの困難を抱えた可能性を指摘している。筆者の学生相談室での相談活動を振り返ると、2020年度に入学した学生が、他学年と比べて、修学・心理面、対人関係、そして進路においてより多くの困難を抱えていると感じることが少なくない。

よって、本論では、大学1年目を対面で経験した場合、学生がどのような経験をし、それが学生生活全体においてどのような役割を果たしてきたかについて述べる。次にコロナ禍が始まった2020年に当時1年生だった学生が直面した困難を振り返り、対面授業が少なく、オンキャンパスでの交流が少ない状態で大学生活を送ったことによる影響を考察する。最後に、これらの困難な時期を過ごした学生が必要とする関わりや関係性について考察する。

なお、コロナ禍が学生に及した影響は、大学の所在地や種別（国公立もしくは私立大学）、学生の所属学部の規模や授業形態により相当異なるため、本論ではあくまでもコロナ禍で入学した大学生が直面した一般的な困難を取り上げることとする。

II. 新入生について

1. 新1年生が一般的に体験すること（コロナ禍前）

コロナ禍で入学した新入生が置かれた状況を理解する上で、コロナ禍が生じる前に一般的に新入生が大学1年時にする体験を知ることが重要と思われる。そこで、表1に新入生が辿る一般的な大

表1 1年生が初年度に経験すること（コロナ禍）

| 学期 | 月 | 大学行事 | 学生が体験すること | |
|----|---------|--|--|--|
| | | | 授業関連 | サークル・友人関係 |
| 前期 | 4月-7月 | 入学式 オリエンテーション | ・所属学部、授業、大学生活全般の情報を入手 | ・サークルや部活の勧誘 |
| | | 授業開始 | ・キャンパスでの授業 ・90分授業 ・大講義室での授業 ・語学など少人数クラスでの学習 | ・授業の合間で友人や知り合いができる ・サークルや部活動への参加 ・飲み会などで親睦を深める |
| | | 履修登録 | ・専門科目・選択必修科目 ・一般教養科目の履修 | ・教員や授業に関する情報交換 ・履修のコツの伝授など |
| | 7月-8月 | レポート課題/期末試験 | ・大学の試験 ・論述試験など、広い範囲からの出題 ・レポート課題の作成 | ・試験・レポートに関する情報交換（先輩・同級生） |
| | 8月-9月末 | 夏季長期休暇（2ヶ月間） アルバイトや教習所、サークル/部活動 | | |
| | 9月頃 | 成績の送付 | ・前期履修した授業の評価 | |
| 後期 | 9月下旬 | 授業開始 | | ・前期と同じ （情報収集・相互の支え合いなど） ・友人関係の継続・深まり |
| | 10月 | 履修登録 | | |
| | 1月-1月下旬 | 期末試験 | | |
| | | | | |
| | 1月末-3月末 | 冬季・春季 長期休暇（2ヶ月間） アルバイトや教習所、サークル/部活動など | | |
| | 3月頃 | 成績の送付 | ・後期に履修した授業の評価 | |

*表のうち、アミカケの箇所は、学生がコロナ禍により体験できなかった箇所を示す。

学行事や、授業や授業外活動でする体験を示した。以下、時系列に沿って説明をしていく。

1.1 入学式前後

まず、4月初旬の入学式では、所属学部のオリエンテーションが実施され、大学生活に関する基本的な情報が提供されることが多い。その際、先輩による大学のサークルや部活への勧誘がなされることも多く、入部に至る新入生も一定数いる。

その後、授業が始まるが、履修登録までの2週間程の間に、学生は関心のある授業に出て、そこで初めて大学の授業の様子や雰囲気に触れることになる。この時期の学生の心の中には様々な気持ちが渦巻いており、受験勉強からの解放感や、新生活への期待感を抱くとともに、大学という新しい

環境に入り、授業についていけるのか、友人ができるのかなどと様々な不安を抱えていることが多い。

1.2 履修登録

4月半ば頃に履修登録が始まるが、これは新入生が大学で直面する最初の難関となる。学生は、所属する学部のルールを頭に入れながら、多くの情報の中から必要なものを取捨選択し、半年ないし1年間の履修計画を作らなければならない。例えば、所属学部の必修科目や、選択必修科目から授業を選んだり、1年次に履修する語学の授業も登録し、さらに多くの選択科目から興味のある授業を選ぶことになる。新入生は、高校までは学校から与えられていた時間割をこなしていたが、そ

れとは異なる主体的に選ぶシステムに戸惑う者も多い。

このとき、どの授業を選ぶかにあたり、多くの有益な情報を提供してくれるのが、大学のプロフェッショナルなスタッフである学部事務室や教員である。

また、非公式のルートとして、入学式に勧誘を受けたサークルや部活の先輩学生の存在がある。先輩たちは、経験上、新入生が履修のどの点で混乱しやすいかを知っているため、履修のポイントを伝えることが上手いことが多い。また、実際に授業に出ているため、教員のキャラクターや、課題・テスト、授業の難易度など多岐に渡る情報を持ち合わせている。先輩たちも自分の部やサークルへの勧誘に必死なため、熱心に教えてくれることが多いが、その是非はともかく、先輩たちが、新入生のナビゲート役となり、先輩と後輩のネットワークや関係が形成されていく側面がある。

また、これ以外に、学部の友人が授業に関する情報を入手し、学生同士で休み時間等に共有したりする場合もあるし、家族に大学進学経験のある者がいる場合は、基本的なことを教えてもらうことも多い。

1.3 大学の授業と期末試験・レポート

履修登録が終わると、大学の授業が本格化する。学生は、大講義室で90分間、授業を受け、大人数で一斉に教員の話聞くことになる。高校の1クラス50分、30名程度の授業に慣れている学生は、突然の変化に戸惑う者も少なくない。

また、学生にとり、授業と授業の合間の10から15分の「休憩時間」が交友関係を広げる時間となる。学生はなんとなく隣の人と眼が合って話をし、知り合いや友人になる場合がある。もし、自分が授業を欠席した場合は、授業の情報や課題を友人から教えてもらえるし、逆に相手が欠席した場合はそのフォローをすることもある。つまり、単位取得に向けた一種のセイフティネットワーク

として機能する面もある。このように学生は大学特有の空気に触れ、授業を通して友人関係も少しずつ築いていくことになる。

学期末が近づく7月頃には、初めて大学の試験を受け、レポートを作成・提出することになる。試験では、高校の中間・期末テストのようにあまり授業範囲を区切って出題されないため、幅広い範囲を勉強しなければならない。また、暗記だけではなく、論述問題もあるため、その新しい方式に戸惑う者もいる。レポートを課せられた場合は、情報を収集・要約して、論じるという大学のスタイルに従って書くことになり、苦勞することも多い。このため、1年生は大学特有の評価システムに初めて遭遇し、緊張と不安に見舞われることが多い。しかし、学生たちは、先輩から過去の試験問題に関する情報を入手し、友人からは自分が病欠で休んだ分のノートを見せてもらうなどして、試験や課題に取り組んでいくことが多い。ここでも先輩や、知人・友人のネットワークが生きることになる。

1.4 夏の長期休暇

その後、8月に試験期間が終わると、後期が始まる9月末までの約2ヶ月間が夏の長期休暇となる。学生相談室で1年生と面接をしていると、2ヶ月間という休みの長さに驚き、「何をして良いか分からない」と当初は、戸惑う学生も少なくない。しかし、比較的、長く自由に過ごせるこの期間の学生の過ごし方は様々であり、初めてアルバイトをする者や、自動車の免許を取るために教習所に通う者、サークルや部活動に精を出す者などがある。

その後、長期休暇が終わる頃に前期の成績を受け取り、前期の授業への取り組みの結果を知ることになる。そして、自分が前期に行ったことと成績を照らし合わせ、成績の妥当性について考え、大学で学ぶ上での標準や平均を知ることとなる。

1.5 後期

後期は、基本的には前期と同様、履修登録を行い、授業を受けることになる。前期は、大学の授業に適應すること一杯で、大学に慣れなかった学生も、友人を作ったりして少しずつ自分で学内外での行動範囲を広げていく者もいる。また、学期末にはレポートを提出したり、試験を受け、再び長期の休みに入る。

多くの学生は、入学当初に抱えていた「自分が大学に適應できるのか」という不安も、大学の授業に出席し、大学で出会った人たちとの関わりを通して和らぎ、次の学年に進むことになる。

2. 大学1年目の期間が果たす役割

これまで大学入学後に1年生が辿る一般的な経緯を見てきたが、これらは学生の成長にとりどのような役割を果たすのだろうか。

高校と大学を比較した場合、高校は校則が厳しく、学生は授業への出席を求められる。また、高校では教師の発言が生徒の価値観に与える影響が比較的強く、学生も教師の言うことをよく聞く傾向にある。毎年、大学では4～5月あたりまで真面目に授業に出席し、教員の指示を熱心に待つ新生が多いのも、高校時代の影響が強いためであろう。しかし、一旦、大学では出席や勉強が、学生個人に委ねられている部分が多いことを知ると「適度に」休んだりし、学生なりのペースで授業を受けるようになる。また、授業も高校では既に時間割が決まっているのに対し、大学では専攻の必修科目はあるものの基本的には自分で授業を選択し、授業予定を作ることが多い。つまり、高校と比べて、学生に与えられる裁量が多く、学生は自ら考えて履修科目や日々の過ごし方を決め、大学生活を組み立てていくことになる。

また、大学は受験を想定した高校の勉強とは異なり、アカデミックな学問の場であるため、高校のように授業内容を暗記して、試験に備えるよりも、講義を聴き、学術書を読み、そこから自分で

考えたことをレポートで論じることが増える。また、大学のゼミでの発表では周囲の意見に流されず主体的に考え、自分の論理を展開し、議論することが求められる。つまり、大学では、他の意見や価値観に従い、それに同調するのではなく、何かに疑問を持ち、自分で考えることが重要視される風潮が強い。このような大学の文化が学生の思考や価値観の形成に及ぼす影響は大きく、学生は大学に身を置くことで、無意識のうちに広い視野で物事を考える姿勢を身につけてくことになる。

また、大学での人間関係も学生にとっては大きな意味を持つ。高校では、比較的、限られた人数で固定化された人間関係であることが多いが、総合大学の場合は、色々な学部に所属しており、学生の出身地も様々で、学生はそれまでの自分の居住地域とは遠く離れた土地の人と知り合うことが多い。そのため、学生は多様な考え方に触れ、互いに意見を交換する中で、自分の世界を広げる契機を得ることになる。さらに、サークルや部活など、学生同士で形成する一つの社会において、人との付き合い方を学んでいる面もあろう。

最後に、大学の長期休暇が果たす役割も大きい。合計すると年間約4ヶ月間あることになり、1年の1/3に相当する。高校では、休み期間でも補習や講習があり、大学受験や部活について親に色々と言われることが多いが、大学の休みは、誰かに何かを強制されることは少なく、基本的に自分の自由な時間となる。

そのため、その時間を利用して、アルバイトを始める学生も多く、アルバイト先で人との関係を築いたり、接客を通して、社会の常識や厳しさを知る契機となることも少なくない。つまり、実社会との関わりの中で、実体験を通して学び、成長する機会を得ていることになる。長期休暇を過ぎて学生に会うと、学生が驚くほど変わり、成長を感じることがあるが、休み中に様々な体験をしたためと考えられる。

このように、学生は1年の中で、それまでの高

校などの環境により培われた価値観から離れ、大学の新しい文化や人間関係、そして実社会に触れることで、自らの価値観を徐々に形づくり、その後の大学や就職活動のベースを構築しているといえる。

Ⅲ. コロナ禍の状況（2020-2021）

1. 感染者数と緊急事態宣言の発令時期、授業形態

次にコロナ禍で入学した1年生が直面した状況について検討するために、2020年から2022年に至るまでのコロナ禍の状況と実施された授業形態について述べる。表2は、2020年から2022年までの間に緊急事態宣言が発令された時期、そしてまん延防止等重点措置の期間を示したものである。

これを見ると、2020年から2022年9月30日までの1年半の間に、4回に渡り緊急事態宣言が発令されている。この時期は、ワクチンが開発されておらず、新型コロナウイルスに感染した場合の有効な手立てが少なく、行動や対人接触の制限も強かった。このため、日本の多くの大学でも、2020年度・2021年度前期までは、感染拡大防止のために遠隔授業が多く占めることとなり、対面授業については、各大学がそれぞれの状況に応じて試行錯誤を繰り返しながら手探りで実施する状態であった。その後、2021年夏頃にワクチンの職域接種が始まり、感染者の重症化率が減り、行動の幅が少しずつ広がり、2021年後期から徐々に対面授業が増えることとなった。

なお、遠隔授業の実施形態であるが、紙面の都合上、詳細に述べることは難しいため、詳しくは他を参照していただきたいが、筆者が把握してい

る範囲では、A) 動画配信（オンデマンド型） B) Zoom などを用いたリアルタイム授業 C) 文献購読 D) 混合型の4つの形態があり、教員は、それぞれ自分の授業に合った形態を選択していた。

2. コロナ禍において1年生が置かれた状況

ここで、コロナ禍のためにキャンパスライフをあまり体験できなかった2020年度に入学した学生を中心に当時の1年生が置かれた状況を時系列に沿って、見てみたい。

2.1 入学式

まず、入学式であるが、コロナ禍では感染拡大防止のために大人数での集会が取り止められたため、実施されなかった。このため、例年行われていた、新入生へのサークルや部活への勧誘は、対面ではほとんど行われず、学生は先輩との関係を作る機会を得ることが困難となった。

2.2 履修登録

4月の履修登録であるが、対面での授業が取り止めになったため、学生は授業や教室の具体的なイメージがないまま履修をすることとなった。また、コロナ禍により、教員や事務員に履修について従来のように質問することが難しく、サークルや部活の先輩などから情報を得るルートも利用できなかった。このため、新入生は、授業に関する大量の情報の中から、どの単位を履修するかをあまり手がかりのない状況で考えなければならなかった。履修の仕方によっては、1年ないし、そ

表2 緊急事態宣言の発令時期・まん延防止等重点措置の期間

| 年 | 回数 | 緊急事態宣言 | まん延防止等重点措置 |
|-------|-----|-----------|------------|
| 2020年 | 第1回 | 4.7～5.25 | — |
| 2021年 | 第2回 | 1.8～3.21 | |
| | 第3回 | 4.25～6.20 | 4.5～9.30 |
| | 第4回 | 7.12～9.30 | |
| 2022年 | — | — | 1.9～3.21 |

の後、数年の履修計画にも影響するため、相当な不安とプレッシャーの中で、履修登録を行ったことは想像に難くない。

家族に大学に通うきょうだいや、大学を卒業した両親がいる場合は、アドバイスをもらい登録できた者もいるが、そのような環境がない学生は、より多くの困難に見舞われた。

2.3 大量の動画視聴とレポート課題

次に授業であるが、授業はほぼ全てオンラインや動画視聴に置き換わることとなったが、当時多くの者が直面したこととして、インターネット環境の問題があった。政府によりステイホーム・在宅勤務が推奨されたため、全国的にインターネットの使用量が急激に増加し、通信が不安定になることが頻発した。このため、学生もまた、通信が不安定な中、遠隔授業を受けなければならなかった。

また、当時の遠隔授業では、教員が動画を公開し、学生がそれを視聴するというオンデマンド型授業が多かったが、このタイプの授業の場合、教員は対面授業よりも多くの課題を学生に出す傾向にあった。これには様々な理由が考えられるが、対面授業であれば、教員は、教室での学生の表情や受講態度から、反応が分かることが多いが、コロナ禍では、それができない状況となった。そのため、教員は、自分の授業がどのように学生に受け止められ、学生がどの程度、授業を理解しているのかが分からないため、それらを確認するために、多くの課題を求めた可能性がある。また、遠隔授業で、学生との双方向のやりとりを生み出し授業に活気をもたらすために、学生に毎回、課題を課した可能性もある。しかし、学生側からすれば、多くの授業で出される大量の課題を抱え込むことになった。

以上が、遠隔授業で一般的に見受けられた傾向であるが、1年生の場合はさらに多くの困難を抱えることとなった。その一因として、学部による

違いはあるにせよ、履修単位が他学年と比べ多く、より多くの課題をこなすことを求められたことが挙げられる。学生が1週間で6～10コマの授業を履修する場合、1日あたり5～6時間もしくはそれ以上の授業動画を見ることになり、1日の大半をPC画面に向かって過ごすこととなった。中には、課題の多さや、PC作業の多さから、頭痛や眼精疲労、肩こりが生じ体調を崩す学生もいた。内田・黒澤(2021)は、全面オンライン授業下での新入生の身体・精神的健康を定量的に明らかにすることを試み、調査結果から、学生が身体症状(眼精疲労、首・肩・背中での痛み、頭痛)を呈し、さらにうつ・不安障害が疑われる者も一定数いるとした。この点からも、新入生には相当大きな負荷が掛かっていたといえる。

さらに、学期末のレポート課題も対面授業時より多く出された。通常、試験をオンラインで行う場合、手続きが複雑になり、かなり習熟している者でなければ、円滑に行くことは難しい。また、オンライン試験がうまくいかなかった場合、学生が試験を受けられず、試験の再スケジュールをするなど労力が余分に掛かることになる。そのため、試験に代わってレポート課題を出す授業が増えたが、このことは、1年生が、日常的な課題にさらに上乗せされた大量のレポートを抱えることになった。

また、人によってはレポート作成に苦闘する者が多かった。というのも、大学のレポートは、アカデミックライティングがベースにあり、ある物事について論理的に考えて、それについて論じるという側面が強い。1年生の中には、高校ではそのような書き方の説明や訓練を受けていない者も多く、レポート作成にかなり時間を費やすなど困難を抱える者も少なくなかった。

遠隔授業は、コロナ禍において学生が学業を継続することを可能にし、多くの貢献をしたことは確かであり、その有用性を否定するものは少ないであろう。しかし、突然生じたパンデミックに緊

急で対応するために取られた手段であったため、コロナ禍における遠隔授業により生じる学生の窮状を、当初から予想して備えることは困難であった。このように考えると、遠隔授業では、学生の状況やキャパシティに応じて段階的に試行するという視点も重要になると思われる。例えば、学生がどれだけの授業を履修し、そのうちどのような課題をいくつ提出する必要があるかを確認し、過度な負担にならないように調整をする必要があったのかもしれない。しかし、学生が様々な学部の授業や、非常勤講師の授業を多く履修している場合、調整が困難な面もあった。このため、教員対象にレポート量の増加に関する注意喚起をすることはできても、根本的な解決を見出すのが難しい状況にあったといえる。いずれにせよ、新入生はレポート作成、課題提出のために一人でPCの前で、課題作成に追われて前期が過ぎていくことになった。

2.4 特に不利益を被った学生の層

また、コロナ禍における遠隔授業において、個々の学生の事情が影響し、特に困難な状況に陥った学生達がいる。例えば、学生によっては経済的な事情により、一家で一台のPCを共有しているため、常時、PCを使用できる環境にいない者もいた。そのため、リアルタイムの授業に出席できない者や、日中は、他の家族がPCを使っているために夜遅くに課題をこなす者もいた。

また、高校によっては、PCを用いた授業やITに関する授業にそこまで力を入れていない場合があり、学生によっては基本的なPCスキルが不足しているため、課題やレポート提出に膨大な時間が掛かる学生が一定数いた。これは、先ほど述べた履修登録と同じであるが、家族に職場や学校でPCを使う者がいれば、基本的な使い方を教えてくれるが、そうではない場合は、学生は自力でPCスキルを学びながら課題をこなすという二重にタスクをこなさなければならなくなる。

これらの問題は、コロナ禍前から存在しているが、周囲に頼れる人がいなかったり、経済的に困窮している学生は、そうではない学生と比べ、非常時にはより困難な状況に置かれることになる。このような格差の問題は今後も、継続して検討する必要があると思われる。

2.5 学期がある程度、経過した頃に生じた問題

学期が進むにつれ、1年生の間では、キャンパスライフを送れず、対面授業に出席できないことにより生じる問題が徐々に現れた。

対面の授業であれば、大講義室での90分間授業の雰囲気や、欠席や遅刻の扱いが分かり、授業で隣の学生が何をしているかを見ることができ、自分が授業で行っていることが正しいのかの確認ができる。しかし、オンデマンド型の授業だと、自分一人で動画を見ることになり、個別学習が基本となる。また、授業がリアルタイムで行われる場合でも、画面には、教員の顔とスライドだけが映り、学生達は顔出しをせず名前だけが表示されることも多い。このため、学生は周囲の様子が分からないまま授業を受けることになり、次第に「自分のやっていることは本当にこれで良いのか」という不安を感じるようになる。そして、そういった不安から、適度に休憩を取りながら授業を受けたり、体調が思わしくないときには、成績評価に影響しない範囲で授業を休むことができない学生が一定数現れるようになった。

このような状況で一人で勉強を続けると、学生はおのずと内向き・内省的になり、何か不満を感じても、ベクトルが自分を向くことになる。そして、学期末の時点で、自分が授業で「もっと課題ができたはずではないか」、「努力が足りなかった」などで次は頑張りたい」などと、過度に自分を追い詰めてしまう自責的な傾向を生み出してしまうことになる。

これが、2年生以上の学年であれば、それまで大学で対面授業を受け、キャンパスライフを送っ

た経験から、授業や課題をする際の大体のイメージを持って、遠隔授業に臨めた面があるかもしれない。しかし、1年生にとって、コロナ禍における一人で受ける遠隔授業であるため、授業や大学生活の「平均」や「標準」が分からず、より自分を追い詰めてしまいやすくなった面がある。前掲の表1のうち、アミカケの箇所は、コロナ禍により1年生が経験することが困難だった領域である。これを見ると、学生生活のうちほとんどが、授業や勉強が占めており、友人を作ったり、課外活動を行ったりすることがほとんどない。このため、学生は、1年生のうちのほとんどを大学や社会の人と触れずに勉強をして過ごし、色々な経験をし、参照枠を得ることがより難しい状況に陥り、より内に向かう傾向が強くなったといえる。

また、遠隔授業により起きたもう一つの問題に、授業の間の「休み時間」が失われたことが挙げられる。この授業の合間の10～15分ぐらいの時間は、一般に、教室移動や休憩に使われたり、学生同士でたわいもない話をしたり、授業に関する内容についてやりとりをする時間となる。しかし、遠隔授業の場合、1日中自宅で一人でPCの前に座ってこなし、誰とも話すことなく1日が終わっていくことになる。さらに自粛期間中であるため外出も制限され、余計にうちに籠る時間が増え、授業の合間でなされていた気分転換もなく、友人と話す機会もなく、ただひたすら孤独な中、授業を受けることになる。平常時であれば、ほとんど意識されることのなかった授業の合間や雑談する時間であるが、人間関係や学生同士のネットワークを形成する機会をさりげなく作り出す、貴重な機会であったといえる。

Azmitia, Syed, & Radmacher (2013) は、新入生の大学適応に関する調査を行い、自分の家族、そして特に友人の情緒面でのサポートのある学生の方が、そうでない学生よりも、アイデンティティの統合度が高く、さらにメンタルヘルスの維持・向上がより容易になると指摘している。このこと

から、友人との関係を持てた場合、自分が自分であるという感覚を持って、大学適応や精神状態がより安定するといえるが、このような合間をあまり持たず、友人を作れなかった1年生は、さらに孤独感と不安を感じやすくなったといえる。

また、学期の終わり頃には、自分が次の学年に「進級」できるのかという不安を抱く1年生も多く現れた。大学では、所定の単位を取れば卒業できるため、いわゆる高校のような進級という制度はないが、これらの学生は高校時代の考えが強いまま学期を過ごしていたことになる。

さらに、学生達は前期終了後、長期休みはあったものの外出が制限されたために友人と遊ぶことができず、社会全体に活動が自粛されていたためにアルバイトができず、実社会との接触も極めて難しい状況にあった。

前述したように、大学入学後、学生は大学での授業体験や様々な人との関係を通して、高校のルールや常識から離れ、徐々に大学に慣れていく。しかし、1年生の多くは、高校から大学への移行を体験できず、どこか高校の常識やルールが優勢のままの状態ですべての学期を過ごしていたことになる。このように見ると学生達は、コロナ禍で社会的に孤立し、周囲との関わりが少ないカプセル化された中で過ごしていたといえ、いかに学生同士が実際に会い、キャンパスの内外で時間を過ごし、色々なことを共に体験することが重要なかが分かる。

以上、コロナ禍1年目で1年生が直面した状況について述べたが、次にコロナ禍と遠隔授業が学生に及ぼした中・長期的な影響について考えたい。

IV. コロナ禍による中・長期的影響

1. 対面授業・対人関係・場への恐怖

ワクチン接種が進み、2021年度後期からようやく対面でのキャンパスライフが可能になり、対面授業が行われることになった。学生の中には、積極的にその機会を活用する者がいた一方で、一部

の学生からは、対面授業再開への消極的・否定的な態度が見られ、遠隔授業を求める声もあった。学生の中には、コロナ禍で1年半、外出もあまりせず、人と会えない中で、今更、対面授業になり人間関係を一から作ることを億劫に感じる者がいたのかもしれない。しかし、注意深くうかがうと、やはりコロナ禍の中で、各個人が再び動き出し、人との関係を築くことに関して、相当な心理的負荷があったことが浮かび上がってくる。

この時期は、体育会系の部活動が再開された時期であるが、アキレス腱を痛める学生が急増した。怪我の理由として、急な練習再開により運動量が増え、身体への負荷が増えたことが考えられるが、コロナ禍でも一人で練習を行っていた者もいることを踏まえると、それだけでは説明がつかない。この時期に起きたことで重要なことの一つに、試合が再開されたことが挙げられる。集団競技の試合では、他の選手や試合の流れを含めて動くため、状況に応じて急に力を入れたり、抜いたりするなど「緩急」をつけて動くことになる。しかし、コロナ禍でそのような状況が少なく感覚や勘が鈍くなったため、急に試合が始まると加減が分からず、アキレス腱に過度な負担が掛かったと考えられる。個人練習で鍛えられる部分はあるが、人がいる実戦になるとその状況に身体も心も慣れしておく必要がある。

これは、対人関係にも当てはまり、人と話す場合、自分だけのペースで話すのではなく、相手の話を聴いてそれに合わせて話をし、相手との間合いを読み、話に緩急をつけることが必要となり、それ相応の負荷が生じる。学生の対面授業再開への消極的な姿勢の背景には、急に無理をして環境に合わせて問題が生じることを無意識的に防ごうとした心の動きがあったとも考えられる。いずれにせよ、学生の後ろ向きな発言の中には様々な意味が込められていることを覚えておく必要がある。

また、これ以外にも、インターネットの情報に

過度に頼りすぎる学生が増えた問題がある。彼・彼女らは情報を収集し、判断することは速いが、それについて考え、検討してから行動することにおいては、心許ない者が多く見受けられた。

コロナ禍が長期化し、人と会う機会が少なくなり、さらに人や集団と関わることを避ける場合、どうしてもインターネット上で得た情報が学生の考えや行動に強い影響力を持つようになる。学生からすれば、人と会って情報を得るよりも、インターネットを介して情報を得る方が、楽に収集できるため、そちらを選択するのであろうが、大学生活における経験が乏しい中で情報過多になると自らの体験と照らし合わせて情報を吟味し、それについて考えることが減る可能性がある。

経験が不足する場合は、先生や先輩、同期など実際に何かを経験した人の実体験や生の声を聞くことで得られるものも多く、実際、コロナ禍前は、大学で色々な経験をしている先輩や同僚、教員と会い、話の中で情報を得て、そこから自分で考える判断材料を得る機会となっていた。また、それらの場で、自らの話をする中でアドバイスをもらえ、自らの行動を振り返って考えるなど、セーフティネットとして機能していた面があるが、それらの体験がないため、上に述べたような状態に陥っていたと考えられる。

2. 就職に対する不安とインターンシップを選択する傾向

また、2021年の後期あたりから、コロナ禍初年度に入学した2年生の中には、「大学はずっとコロナだったから、将来、自分が就職をできるのか不安」などと、就職活動に関する不安を口にする学生が目立つようになった。この傾向は、全国的にも見られ、2021年に実施された調査では特にコロナ禍初年度で入学した2年生、そして就職活動が目前に迫る3年生が「就職や将来の進路」に関して、より強い不安を有していた（日本私立大学連盟, 2022）。

筆者には、2年生の将来に関する不安が増加した背景には、コロナ禍により経済状況が悪化し、自分の将来が見通せないことによる不安と、大学時代の大半をコロナ禍の中で過ごさなければならなかったことによる不安と焦りがあるように感じられる。

大学の学部時代を二つの時期に分けるとすれば、1・2年の時期は、学生が単位を履修し、サークル・部活をして大学に慣れ、アルバイトなど社会との接点を持ち社会性を身につける時期となる。いわば、大学生活や人との関わりを軸に少しずつ価値観を形成していくことになる。そして、3年・4年では、学生は1・2年の経験をベースにより専門分野で学びつつ、インターンシップや就職活動を行い、社会に出る準備をすることになる。

しかし、コロナ禍で入学した学生は、大学生活の前半の部分に自粛生活を強いられ、実感を持って大学での生活やアルバイトの経験を語ることができない。そのため、「こんな自分が将来、就職して、働くことができるのだろうか」という強い不安を持つかもしれない。また、筆者が知る範囲では、大学での活動や、サークル・部活動よりも、インターンシップに強い関心を示す2年生が例年と比べて多かったが、学生からすれば、限りある時間と機会の中で、採用面接で確実に答えられるようにインターンシップをしたいという焦りのような気持ちが生じるのも当然であろう。

本論を書いているのは、2022年度の終わりであるが2023年度は、2020年度にコロナ禍初年に入学した学生は4年生を迎え、就職活動が本格化することになる。最後にこれらの学生が必要とする関わりや関係性について述べる。

V. コロナ禍で入学した学生との関係で求められること

2021年度後期から2022年度までの1年半の間、学生は比較的対面での授業やキャンパスライ

フを送ることができ、そこで少しずつ経験を積み重ねてきているであろう。しかし、2020年度に入学した学生の中には、あまり友人がいない学生も依然としており、なかなかネットワークが作れず、就職活動で困っても誰にも相談できない可能性がある。そのため、就職活動が本格化する2023年度は、学生のためのセイフティネットを構築する必要がある。これには、学生が困難な状況を一人で抱え込まず、孤立しないように、教員や大学スタッフ、家族が本人のことを折にふれて気にかけるなどが挙げられる。

また、学生と関わる上で、学生一人ひとりに目を向け、学生の「個人差」に留意することは大切であろう。学生達のコロナ禍の体験は、似ている部分もあるが、人によっては置かれた状況や感じ方が随分と異なる。そのため、学生がコロナ禍においてどのような体験をし、いかなる困難を抱え、現在に至るのかを丁寧に聴き、学生への理解を深める必要がある。例えば、遠隔授業や自粛生活がそれほど苦にならない者もいれば、人との接触が大事で、対面で会って話すことに安心するタイプの学生もおり、後者の学生の場合は、コロナ禍は相当にストレスフルで不安な体験となり、就職活動でも困難に直面する可能性がある。このように学生にとり、一人ひとりの文脈が尊重されるだけでも随分と異なるであろう。

また、学生の話聴く中で、学生自身がコロナ禍の体験を自分の中でどのように位置付けるかも重要な点になる。これだけ大きな影響のある出来事に遭遇すると、学生も周囲も、どうしてもコロナ禍により大学で「できなかったこと」や「失ったこと」に目が向きやすくなり、失望や怒りを感じ、悲観的になり、色々なことを諦めがちとなる。しかし、学生が、人と話をすることで自分の体験を振り返り、改めてコロナ禍の状況や自分の心の動きに気づき、それらを捉え直し、位置付けていくことも今後の人生を生きる上で重要になる。コロナ禍による体験は、確かに悲しく、取り返しが

つかないものもあるが、特殊な環境を体験したために、自分の生き方を見つめ直し、人との関係の大切さ・有り難みについても考える機会になった面もある。

次に就職活動について思春期・青年期の観点から考察をしたい。大学の前半の時期は、学生は自分のそれまでの価値観から離れ、様々な体験を通して自己を新たに構築し、後半は、就職活動をして大学を卒業し、親から離れて一人の個人として社会・経済的に自立することが求められる。そして、この就職活動の時期は、学生にとり厳しい時期となることが多い。採用面接に落ちると、学生は落ち込み、自信を失い、相当な心理的なダメージを受ける。しかし、同時にその中で、学生は、「なぜ自分がこの仕事を選ぶのか」、「何のために働くのか」そして、「自分とは何か」などと、自分自身を見つめる時間となる。また、就職活動をして内定を得るのは自分の努力に掛かっているため、周囲への「依存心」を断ち切り、個として自立することになろう。

E.H.Erikson (1963) は、思春期・青年期において、それまでの自分のベースとなる価値観を疑い、様々なことを試し、経験する中で自己の基盤を再構築し、アイデンティティを形成するとしている。つまり、就職活動は自立するための通過儀礼としての機能を有しているが、コロナ禍で入学した学生の場合、大学での活動や人との交流が制限されたため、どうしても自分の内面を育む体験が少なく、自立のための準備が阻害されてしまう。学生にすれば、大学であまり体験ができなかったにも関わらず、急に就職活動という現実を突きつけられ、困惑するのも想像に難くない。では、このような学生にはどのようなことが必要になるのだろうか。

日本では、大学3・4年目に入るとインターンシップや就職活動を始めることを是とする風潮が根強く残っており、学生が大学3年の後半、4年時に就職活動をする流れとなる。猪野 (2022) は、

自身もコロナ禍で入学した学生であるが、コロナ禍で入学し、友人が作れず、就職活動を始めざるを得ない学生達が抱える困難について述べている。しかし、多くの企業は、コロナ禍が落ち着くと、コロナ前と同じスピードで採用を進め、経済が回り始めるであろう。

コロナ禍で大学生活を送らなければならなかった学生の場合、彼・彼女らの内面が育ち、自立するための「時間」が必要となる。あまりにも、周囲が本人の状態を見ずに就職活動を迫ると、内面が未成熟のまま自立を強いることになり、いずれ本人も息切れし、より心理的に困難な状況に陥る危険性がある。このため、まだ、自立に向けた準備が十分ではない学生にとっては、経済状況が許すならば、卒業を延ばすことを検討するのも一つであろう。これは、学生がその後の人生を生きるための土台を作る時間と機会を確保することになろう。

そして、最後になるが、今一度、学生にとって人と関わりを持ち、体験することの意味を考える必要がある。高石 (2022) は、コロナ禍における物理的な距離が「共に『居る』体験の機会を奪い、学生の成長にとって重要な「こころの『密』」のさらなる喪失という事態を生んでいる」とし、このことを不問にしたままポストコロナへ向かおうとする社会の動きに疑問を呈している。

学生のみならず、人が成長し、自らの内面を育む上で、何かしらの体験をしたり、人と関わることは不可欠であり、この意味で、そのような場を大学や、社会全体で作る努力をする必要がある。しかし、学生の中には、長引くコロナ禍の影響を受けて外の世界に出向き、人との関係を築くことにやや躊躇する傾向が見られる。

筆者が担当する学生相談室スタッフが提供する少人数制の授業では、毎年、学期開始時に学生に自己・他己紹介をしてもらう時間を設けている。コロナ禍前は、学生の距離が近づき過ぎるためか、早く済まそうとする学生がおり、やや不人

気であった。しかし、2021・2022年度のコロナ禍では、最初は話すことを躊躇していた学生も、いざ実施すると、お互いの話をし始め、最後は「あまり人と話すことがなかったので、もっと自己・他己紹介の時間を作ってほしい」との要望を多く受けた。周りがコミュニケーションの契機となる「枠組み」を用意すれば、学生はそれをうまく使い、後は、学生同士で関係を深めていく場合が多い。

一見、人との関わりを避けているように見える学生でも、どこかで人と関わりたいという気持ちも持っており、それらの潜在的なニーズを汲み取り、学生同士で関係を育めるような環境や土壌を作っていくことは重要である。ただし、学生によってはこのようなやりとりを苦手とする者もあり、一人ひとりの学生がどのような距離感であれば安心であるかを探ることも必要であろう。

コロナ禍による制限により、人の中に入り、直接体験する機会が少なかったが、人間同士の関わりを通して体験して成長し、洞察することの価値が失われたわけではない。コロナ禍で数多くの苦難に見舞われた学生にとり、まず、安心感を感じ、自分のペースで動くことができることが重要であろう。そして、その後の人生を生きる上での自分の核を作れる場と空間、そしてそのようなことを可能にする関係性が何よりも大切なのではないだろうか。

文 献

- Azmitia, M., Syed, M., & Radmacher, K. 2013. Finding your niche: Identity and emotional support in emerging adults' adjustment to the transition to college. *Journal of Research on Adolescence*, 23, 744-761.
- Erikson, E. H. 1963. *Childhood and society* (2nd Ed.). W W Norton & Co Inc.
- 猪野陽菜 2022 「憧れの大学生活」あきらめ続けた2年間。就活を目前に感じる焦りとむなしさ *Business Insider* <https://www.businessinsider.jp/post-260502> (2023.1.5 取得)
- 山内星子・松本真理子・織田万美子・松本寿弥・杉岡正典・鈴木健一 2020 大学における新型コロナウイルス感染症流行下の学生支援実践と今後の課題 *学校心理学研究*, 20(1), 47-54
- 関西大学教学 IR レポート 2022 コロナ禍における授業・学生生活に関する調査レポート https://www.kansai-u.ac.jp/ir/ir_corona_report.pdf (2022.12.4 取得)
- 厚生労働省 データからわかる - 新型コロナウイルス感染症情報 <https://covid19.mhlw.go.jp> (2022.12.4 取得)
- NHK 特設サイト新型コロナウイルス <https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/entire/> (2022.12.4 取得)
- 日本私立大学連盟 2018 私立大学学生生活白書 2018 https://www.shidairen.or.jp/files/topics/449_ext_03_0.pdf (2022.12.1 取得)
- 日本私立大学連盟 2022 新型コロナウイルス禍の影響に関する学生アンケート報告書(概要版) https://www.shidairen.or.jp/files/topics/3680_ext_03_0.pdf (2022.12.15 取得)
- 日本私立大学連盟 2022 私立大学学生生活白書 2022 https://www.shidairen.or.jp/files/topics/3651_ext_03_0.pdf (2022.12.1 取得)
- 佐藤枝里・渡邊素子・北岡智子・鈴木雅子・谷口洋子・和合香織・和田浩平・稲山かおり・願興寺礼子 2021 学生相談室におけるコロナ禍での学生支援—予防的心理教育の視点から— *中部大学教育研究* 21 41-49
- 高石恭子 2021 高等教育の遠隔実施下におけるハイブリッド型学生相談についての一考察 *甲南大学学生相談室紀要* 28 62-75
- 高石恭子 2022 コロナ禍が加速した学生の体験様式の変容について—こころの「密」の喪失と回復という観点からの一考察— *甲南大学学生相談室紀要* 29 40-52
- 内田知宏・黒澤泰 2021 コロナ禍に入学した大学一年生とオンライン授業—心身状態とひきこもり願望— *心理学研究*, 92(5), 374-383

ABSTRACT

On the Difficulties of Japanese University Students Who Entered University During the Pandemic and Its Implication for Necessary Relationship :From a Perspective of a Japanese Student Counseling Center

NISHIURA, Taro

Konan University

The COVID-19 began to spread in 2019 and has led to significant restrictions on human contact and interaction around the world. At Japanese universities, the disease had a large impact on university students' lives, studies and mental health. In September 2022, the in-person classes have been implemented to a large extent and the interaction between students seem to be active again, however, university students who entered the university in 2020 and 2021 are strongly affected by the restrictions in 2020 and 2021 and are likely to face many difficulties in their studies, lives, and thus experienced psychological distress.

In this paper, we first overview university events and classes that were generally held before the pandemic, as well as activities in clubs and interaction with their friends and examine what kind of role it played in the adaptation of the first-year students. Next, we will discuss the situations experienced and challenges faced by them and explore what kind of relationship and support is needed for students who have insufficient experience in their university life due to pandemic.

Key Words : pandemic, first-year students, mental and social support
